

# で輝く 中学生たち



配の方までさまざまなジャンルの音楽を楽しんでいる。  
年はマーチングバンド・カラーガード全国大会で、  
遂げた。両校のルーツと今を追っていく。

毎日、全力投球!  
私たち、マーチングバンドの強豪校なんです  
豊野中学校吹奏楽部



## 今から20年以上前、 音楽で学校が変わった

「もう一度やって。もう一度!」  
「はいっ!」

8月のお盆休みのある日、ウイング・ハット春日部のメインアリーナでは、あちこちで元気な声が響いていた。豊野中学校吹奏楽部が、翌週に控えた埼玉県マーチングコンテストに向け、本番と同じ会場を借り切つて、最終の仕上げに向けた練習をしていた。気温は35度。生徒たちの額からは汗が流れ落ちる。ぬぐう間も惜しんで一心に取り組んでいた。

アリーナの片隅では大人たちが集まって、コンテストで使う旗や小道具を作っている。

「頑張っている子どもたちや先生を少しでも手伝いたくて」とサポートに駆けつけた保護者の方々だ。

生徒、指導者、卒業生、保護者。そこには、全員が丸となってコンテストでの勝利を目指している姿があった。後述する春日部中学校も同様だが、保護者を巻き込んだのチームワークのよさは両校の伝統だ。

そんな両校のこれまでの歩みを教えてくれたのは北川房男さん。春

日部市を拠点とする楽器店で、長年、地域の学校音楽教育の現場をサポートしてきた。

「豊野中と春日部中でマーチングが始まり、市内に根づいたのは、かつての顧問、木村信之先生の存在が大きかったですね。木村先生は音楽で学校を変えようと力を尽くしていました」

日本がバブル崩壊に差しかかる今から20年以上前、揺れていたのは大人たちの世界だけではない。教育の現場でも混乱が起きていたという。



北川さんは当時を「生徒たちはどこに気持ちをおぶつけていいかわからなかったの。校舎の窓ガラスを割ったりする生徒も少なからず

いましたね」と振り返った。

そんな時代、20代だった木村先生は、新任音楽教師として豊野中学校に赴任。大音量で音楽を聴く生徒には「音楽が好きならギターを弾いてみないか」と声をかけ、クラスで目立つ子には「合唱で指揮をやってくれ。このクラスをまとめられるのはお前しかいない」と指揮棒を握らせたという。木村先生は、音楽を通じて生徒たちの心を少しずつ開いていった。

# マーチング 春日部の

春日部は音楽が日常に溶け込んでいるまち。子どもから年  
特に中学校の吹奏楽やマーチングは盛んで、2012  
市内の2校が金賞受賞という快挙を成し





## 「全員がレギュラー」 それがマーチングの魅力

現在、久喜市教育委員会指導主事を務める木村先生は、当手を振り返ってこう語る。

「悪い子なんていなかった。中学生は自分を認めてもらいたいと思う年頃。だけど、どう表現すればいいかわからないから、自分流にいろんな方法で自己表現していただけ。だから、



音楽で自分を表現する方法を教えなかった。音楽という決まりの中で自分をどこまで表現できるか。それを知り、人に聴いてもらい喜んでもらえれば、自己有用感（自分がどれだけ大切な存在か認識すること）が満たされ、自信もつきます」

木村先生の元には当時の教え子から「音楽を通じて自信や可能性を見つけることができた。今の自分があるのは中学時代のおかげ」といった内容の手紙が寄せられるという。

木村先生は豊野中学校で、部活に

も力を入れ、新しい取り組みを始めた。当時、埼玉県でも数校でしか行われていなかったマーチングを吹奏楽部に取り入れたのだ。

吹奏楽コンクールでは、編成によって人数が決まっているため、大会に出られない子が出てくる。しかし、マーチングは人数の制限がなく、全員が確実に参加できる。まさに「全員がレギュラー」という大きなメリットがある、と考えたからだった。

マーチングは、音作りだけでなく、動きも加わるため、相当な練習量が必要となり、休みはほぼなくなる。そのため、木村先生は保護者に対し、部活説明会を何度も開き、理解と協力を求めていった。地域との連携にも力を入れ、演奏の依頼があれば、できるかぎり参加。保護者や地域の人々たちを味方に、豊野中学校の吹奏楽部はみるみるうちに力をつけ、西関東大会で金賞を獲得するまでになった。



※「マーチング」とは……吹奏楽活動の一つで、演奏をしながらその曲に合った動きを加えたもの。カラーガードが加わった形態と、パレードを中心とした演技形態がある。  
※「カラーガード」とは……マーチングにおいてフラッグを中心とした演技を行うパートのこと。



みんなが一つになったとき  
自然と結果はついてきた

4年前に同校に赴任した現顧問の松本千恵子先生。そもそもは木村先生が指導する春日部中学校のマーチングを見て、「マーチングをやっている子がかかとをつけてまっすぐ立てる。中学生でもきれいに立ってるんだ」と感動し、他校でマーチングの指導を始めたという。その魅力について松本先生はこう続けた。



「マーチングは座奏より難しく、初めは音も動きもぎくしゃくしてなかなかうまくいきません。でも、練習を重ねていると、あるとき、急にできるようになる。点と点がつながるような、その瞬間、毎日が感動の連続です。マーチングはみんなで作れるところもいい。生徒、先輩、先生、保護者の方々、そして地域の皆さんのサポート。全部が一体となって初め

てうまくいく。こんな体験はなかなかできないと思います」

昨年は、松本先生が大会前に1カ月間入院するというアクシデントが起こった。先生の不在中、練習の緊張感はなくなり、大会出場も危ぶまれたという。部長の角谷愛友さんが、その当時のことを話してくれた。「このままじゃダメだね」と当時3年生を中心にみんなで話し合いをしました。誰からともなく「松本先生を絶対に全国大会に連れて行こう」と声が出て、それからみんなの雰囲気も変わって、必死に練習するようになったんです」

松本先生の不在を知り、学内外の先生方や、先輩たちも指導にかけてくれた。そして見事、全国大会金賞受賞。みんなの気持ちが一になり、自然と結果はついてきた。

豊野中学校吹奏楽部、現在の部員は46名。全国大会に向けた彼らの挑戦はこれからも続く。

北川房男さん  
(昭和楽器専務取締役)

両校の吹奏楽の歴史について話を聞いた。「ジャズデイかすかべ」の主要メンバーの一人でもある。春日部のあらゆる世代の音楽文化をサポートしている。



※「吹奏楽」とは……木管楽器、金管楽器、打楽器を基本に、十数名から100名程度の編成で演奏される音楽の形態。ストリングベースやピアノなどが加わることもある。



保護者手作りの小道具・大道具とともに。



西関東大会進出を決めた瞬間。



いざ本番へ

木村信之さん(久喜市教育委員会)

一般企業を経て中学校の音楽教員に。春日部市立豊野中学校、春日部中学校、久喜市立久喜東中学校を経て、現職。

### 「工夫」を教えたかった

木村先生に聞く

生徒たちに何か影響を与えることができたとしたら、すごいのは私ではなく音楽の力。元々音楽を嫌いな子はいない。いるとすれば、音楽の授業中、一人で歌わされたりして、「授業が嫌い」になっている子。そういう子には音楽が好きになる授業をすればいい。みんなで歌ったり、褒めてあげる

と好きになります。合唱や演奏、演技を通して子どもたちに培ってほしかったのは、目標を達成することで得られる自信。それから、目標達成のために「努力すること、自分の我を捨て「我慢すること、みんなで一つのことを成し遂げるために「工夫すること」の三つです。子どもたちはみんな人から認めてもらいたいという気持ち強い。音楽は自分の思いを自由に表現できる。音楽による自己表現で、他人から認められると子どもたちはいきいきとしてくるんですよ。音楽の力は偉大です。



## 学校がまとまっていったとき 誰もが**音楽の力**をあらためて感じた。

卒業生に聞く

### 豊野中学校で得た出会い それが私の人生を変えた

15年以上前、豊野中学校では先輩が厳しい選抜を通してくれたおかげで、ディズニールランドで演奏する機会がありました。私は「入部したらディズニールランドに行ける」という誘い文句につられて吹奏楽部に入ったんです(笑)。もともと親が音楽を教えていた関係で、自然と音楽をやるようになりましたが、豊野中学校で吹奏楽部に入部したときも、将来音楽家になるなんて考えていませんでした。

それが変わったのは、そこで得た出会い、そして音楽へ向き合う姿勢を教えていただいたからだと思います。我慢しながら一つのものを作り上げる厳しさ、その奥にある達成感を体験することで、「何事も誠実に真正面から向き合うこと」を学びました。その経験は今の活動にも役立っています。



川畑麻衣子さん  
(クラリネット奏者)

豊野中学校卒業。音大卒業後渡仏。帰国後は音楽家として活動、高校の非常勤講師等も務める。



春日部市立豊野中学校

昭和52年開校。学校教育目標は「夢創造」。部訓「音も心も上を向こう」を胸に活動している。  
●部員数：46名(3年生19名、2年生12名、1年生15名)  
●顧問：松本千恵子、一條亜津子、田口裕美  
●次回定期演奏会予定：2014年3月23日(日)



地域の皆さんとともに!  
私たち、マーチングバンドの**金賞校**です  
春日部中学校吹奏楽部チャレンジャーズ



藤まつりパレードで知った  
地域の人に披露する喜び

春日部中学校吹奏楽部チャレンジャーズは、マーチングコンテストで上位争いの常連校。今年も全国大会出場を目指し、夏休み返上で練習に励む。

3年生の岡安絢子部長は、「みんなまでステージに立ったときの達成感は何ものにも代えがたい。だから、毎日の練習も乗り越えられる。マーチングって本当に楽しい」と笑う。

春日部中学校の吹奏楽部でマーチングが始まったのは、木村信之先生が赴任した15年前。吹奏楽部の部室をのぞきに行った木村先生が目にしたのは、雑誌を片手にスナック菓子をほおぼる生徒たちの姿だった。生徒たちを変えるきっかけとなつたのが、藤まつりパレードへの参加だった。量販店で買った揃いのTシャツを身につけ、パレードの先頭を飾った。通りを埋め尽くす観客からは拍手の嵐。生徒たちは、練習の成果を披露できる喜びを全身で受け止めた。以来、部員全員がマーチングに夢中になつていった。

当初36名だった部員は年を追うごとに増え、木村先生が他校へ異動となる8年後には136名にまで膨れ上がった。毎年、コンクールで好成绩を重ね、2002年には「マーチングバンド世界大会ジュニア部門1位」の快挙を成し遂げたのだった。



全国大会への遠征費を  
地域の人がバザーで捻出

だが、木村先生が重視したのは、コンクールでの勝利ではなかった。

「コンクールも大切。だけど、生徒には『いちばん大事なのは、年に一度の定期演奏会。コンクールは自分たちのためにやる演奏。定期演奏会は聴きに来てくれる地域の皆さん、学校の仲間たちのための演奏。誰かのために努力することこそ大事にしてほしい』と言いつけていました」

たびたび木村先生の口をついて出る「地域」という言葉。なぜ、そこまで地域にこだわるのだろうか。

「中学校は『市立』でもあるが、『地域立』。つまり地域のもの。『地域が誇れる学校であつてほしい』『学校を応援したい』という地域の方々の気持ちを常に感じていました」

チャレンジャーズ初の全国大会(吹奏楽連盟主催)出場の会場は神戸だった。部員80名を連れていくだけで数百万円かかる。困り果てている彼らを見た当時のPTA会長は、地域の方と一緒にバザーを開き、遠征費を捻出してくれた。地域と春日部中学校との結びつきは今も続いている。



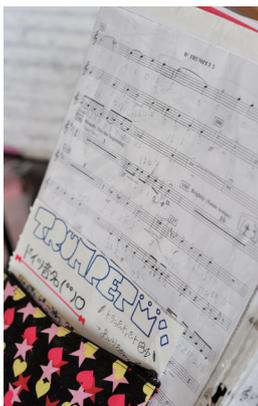
定演を満席にしてくれる  
地域の人たちにいつも感謝

チャレンジャーズの現顧問、山崎里美先生は、「地域に愛される部活でなければならぬ」と思っています」と言う。

「いつも、『凡事徹底(当たり前前)のことを当たり前前にすること』を厳しく指導しています。これが身につけば、地域の人が応援してくれるようになるだけでなく、何よりも、社会で役立つ人に成長できるのです」

演奏や演技ができるだけでなく、地域に愛される礼儀正しい人であること。チャレンジャーズにはそうした伝統も引き継がれている。

毎年3月になると、豊野中学校、春日部中学校はそれぞれ定期演奏会を開く。地域の人たちでいっぱいになった演奏会では、クラシックに加え、童謡やアニメソングなどが披露される。吹奏楽部で過ごした3年間を振り返り、万感の思いを込めて演奏する卒業生の姿は、感動そのものである。



大道具製作のために、休日返上で駆けつけた保護者や地域の方々。大道具は本番では欠かせない演出の一つ。



春日部市立春日部中学校

昭和22年開校。学校教育目標は「可能性に生きる」。吹奏楽部は「当たり前前」をモットーに活動している。

●部員数：69名(3年生20名、2年生24名、1年生25名)

●顧問：山崎里美、梶原和子、山下珠枝

●次回定期演奏会予定：2014年3月22日(土)

